

日本体育学会
体育哲学専門領域

会報

Vol.20(3), November, 2016

記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 私の研究
- ♪ 浅田学術奨励賞・記念講演報告
- ♪ 学会参加リポート
- ♪ 運営委員会からのお知らせ
- ♪ 体育哲学研究編集事務局からのお知らせ
- ♪ 第2回定例研究会のお知らせ
- ♪ 次号予告

巻頭言

明治薬科大学の体育の行く末を憂う

服部豊示(明治薬科大学)

今年度末の定年退職日まで約5か月となりました。この巻頭言が「明治薬科大学」の服部としての最後のメッセージになると思います。65歳です。とはいえ、ありがたいことに健康状態は良好ですので、来年度からは「一杯やっか大学」の服部として箱根の合宿研究会などには参加したいと考えています。以下、あまり景気の良い話ではありませんが、私の後任教員を採用する話が没になった経緯について報告します。お時間のあるときに読んでいただければ幸いです。

私が助手として明治薬科大学に採用されたのが1973年のことでした。当時、大学体育実技は大学設置基準に守られていて必修科目でした。1年次だけですが、年間を通して体育実技が行われていました。1学年は3学科、全6クラスで構成され、1クラスの学生数は約60名でしたが、その60名の実技授業が1名の非常勤講師によって指導(運営?)されていました。この状況を改善するために私が採用されたのだと思います。その後、私が講師に昇格したとき、体育助手を1名採用することができました。これで体育の専任教員が2名となりました。その後、実技授業が学科単位で実施されるようになってからは、授業毎に2名の非常勤講師を加えた4名の教員で、120名の学生を4グループに分けて指導してきました。この体制がしばらく続きました。ところが、薬剤師教育が6年制に移行する過程でカリキュラム改革が実施され、1990年頃から教養課程全般が徐々に縮小されました。

現在、明治薬科大学における体育実技は1年生の必修科目ですが、1日に午後の2コマづきで実技を行うため、前期の7週間で終了してしまいます。「健康運動科学」という講義も担当していますが、これは選択科目であり、週に1コマしかありません。これらの授業を担当するだけでは体育教員2名の教育負担が軽すぎるので、新カリキュラムで新設された人間関係論(必修科目)という講義も引き受けることにしました。学内委員会活動も積極的に引き受けてきたので、おそらく私が退職した後、体育の後任がとってもらえるものと期待していたのですが、残念なことに来年度からはリベラルアーツ分野の教員として心理学の教員を公募して採用することになりました。そして、その教員が心理学と人間関係論の講義を担当することになりました。私が退職しても、まだもう1名体育の教員(准教授)がいるのだから、非常勤講師を増員すれば体育の授業運営はできるだろうという判断が下されたのでした。私の後任には体育哲学領域の先生を大学に推薦したいと公言していたの

ですが、それが実現できず、残念でなりません。

さて、最後に少しか景気の良い話もおきます。2月の入試が終われば私の学内業務はほとんどなくなる見込みです。その頃になれば体育研究室内の私物の片づけに取り掛かれると思います。私の後任として体育の教員が採用されるのであれば、私が研究費で購入した本はすべて研究室に残しておくつもりでした。しかし、その必要がなくなりました。私の大学では、有難いことに2000年頃から書籍は消耗品として購入できるようになりました。消耗品扱いですから、不要になった書籍は自由に処分することができます。そこで、人間関係論の講義を担当するための参考資料として購入した書籍類は、読んでみたい方がいたら差し上げます。「人間関係」だけでなく、「コミュニケーション」や「カウンセリング」に関する書籍もかなりの冊数があります。上記のような書籍に興味をお持ちの方は連絡を下さい。メールをお待ちしています。

服部豊示 (hattori@my-pharm.ac.jp)

体育哲学考

「体育原理再考」

久保正秋 (スポーツ&レジャー研究所)

2005年から私たちの研究領域は「体育哲学」という名称に変わった。もう10年以上が経っている(10周年記念はなかった)。それまでは一体、何だったのであろうか。そう「体育原理」である。20世紀から21世紀への変動の中で「原理」は「哲学」となった。この時の流れを再考してみよう。

この「体育原理」に関しては、石川旦先生が纏めた「体育原理研究50年の回顧と展望」という論文がある(2005年:体育学研究第50巻記念特集:体育原理)。それによると、日本体育学会は1949年に創設し、1950年(私、舛本さんの誕生)に第1回学会大会が開催されたという。この頃の学会では原理的と歴史的な研究が同一部門で発表されていた。私の調べでは、「体育学研究」第1号の冒頭の論文が「体育の哲学的考察」:立命館大学の木村静雄先生であり、原理より哲学が先行したという感じである。それから約10年後、「体育原理研究会」が発足し、夏期合宿研究会と月例会を開催し、それは現在も続いている。そして1962年に専門分科会として承認され、私たちの研究領域は「体育原理」と称することになる。1997年からは体育原理専門分科会に運営委員会なるものが設置され、新しい分科会の運営が始まる。初代の会長は石川旦先生、運営委員長は佐藤臣彦先生である。現在20号の、この「会報」もこの時に生まれた(ということは運営委員会、および会報20周年記念の何かをやるなら本年度)。そして「原理」から「哲学」への変貌の動きも始まっていく。

「原理」から「哲学」への動きの中心的人物は佐藤臣彦先生である。その始まりは、1993年12月、原理の月例研究会における「体育哲学の可能性」の発表であろう(1994年体育原理研究第24号に論文掲載)。その契機となったのが同年6月の「身体教育を哲学する—体育哲学叙説」の出版であると佐藤先生は述べている(この辺の詳細は佐藤先生の「体育哲学の課題」2006年体育・スポーツ哲学研究28-1参照)。そして1999年の体育学研究には論文「体育学の対象と学的基础」が掲載される。そして同年、50年経過した日本体育学会で、「体育学における哲学的研究の現状と21世紀への展望」と題したキーノートレクチャーを行うことになる。司会は大会企画担当の舛本先生(現会長)であった。

そしてその年の11月の「会報」(3号-3)で、「専門分科会名称改定論」と称した会員の投稿が掲載された(この「会報」3号から広報担当の私が編集を行い、投稿コラム「●論」というコーナーを製作した)。その投稿は次のようなものであった。「先の体育学会で佐藤

臣彦氏のキーノートレクチャーを拝聴した。その中でも『体育原理か体育哲学か』という論議は大変に興味深かった。我々の目指しているものが『PPE: 体育実践での利用活用という見地からの体育諸科学の成果の再編』でないとしたら、やはり、本専門分科会の名称も再考されて良いのではないだろうか(K)。実はこの投稿者Kは私。自ら投稿し、編集して掲載。欺瞞的な「会報」製作であるが、会員の方々への名称変更アピールの企てであった。16年前の罪犯し、もう時効であろう。

佐藤先生のキーノートレクチャーの内容は2000年の体育学研究45巻3号に掲載されている。そしてこのキーノートの内容に関しては、先の「体育原理研究50年の回顧と展望」の中で石川先生が大きく取り上げ、専門分科会の展望を論じている(それ以前の1960年前後から1980年代の「体育哲学」論究に関しては高田哲史先生が論じている: 広島大学大学院教育学研究科紀要2007)。

これが変貌の時の流れである。「哲学」へと名称が変わることで、多くの人が離れていくのではないかという不安もあり、またそれを指摘する人もいた。そして20世紀が終わり21世紀となり、「体育哲学」という名称変更は、2005年4月の理事会、6月の日本体育学会総会において承認された。この年から会長佐藤先生、運営委員長が私である。佐藤先生の「体育哲学の可能性」発表から12年(酉年-酉年)の時が流れていた。

(この再考に用いた参考文献は、全てインターネットで検索、収集したものである。退職した私の研究データ入手方法である。この方法詳細は「スポーツ&レジャー研究所」ホームページで公開予定。)

久保正秋 (kubo@keyaki. cc. u-tokai. ac. jp)

書籍紹介

『ギリギリの哲学』との出遭い

川谷茂樹 (北海学園大学法学部)

昨年4月にナカニシヤ出版より上梓したバーナード・スーツ著『ギリギリの哲学——ゲームプレイと理想の人生』は、Bernard Suits, *The Grasshopper: Games, Life, and Utopia*, Broadview Press, 2005の、山田貴裕と私による翻訳書である。内容紹介は「訳者後記」に譲るとして、ここでは原著を翻訳することになった機縁(奇縁?)を少々審らかにしてみたい。

カナダの哲学者である原著者の名前と原著の存在(初版1978)を知ったのは、ひょんなことから「スポーツ哲学/倫理学」に首を突っ込んだ15年ほど前のことである。彼の代表的な論文をいくつか読んだが、その有名なゲーム論は、当時私が取り組んでいた「スポーツとは何か」という問題とは接点がないように思えた。したがって、Suitsのゲーム論を丸ごとスポーツの概念規定に導入するMeierなどの(彼の地でそれなりに有力視されている)議論には、到底首肯できなかつた。私はゲームとスポーツは相互に独立した概念だと考えており、拙著『スポーツ倫理学講義』(2005)もそうした立場で書いた(今もその考えに変わりはない)。だから「ゲーム」を主題とする原著に取り組むことは今後もまずないだろうと高を括っていた。

だが、その種の見込みはえてして外れるもので、約10年後、私は原著と向き合わざるをえない羽目に陥る。当時DreweのWhy Sports?——拙訳『スポーツ哲学の入門』(2012)——の翻訳作業の真っ只中だったのだが、スポーツの概念規定を論じた箇所でも例に漏れずDreweもSuitsのゲーム論の概要を紹介していた(邦訳13-16頁)。はたと困ったのは、prelusory/lusoryというSuitsの造語(しかも鍵概念!)をどう訳すか。Dreweの記述を何度読んでも

訳語が決まらないので、困り果てた挙げ句、Suits の原著に直接当たらざるをえなくなった。「やれやれ、ただでさえ時間がないのに、何の因果か面倒なことになったものだ……」。

ところが、嫌々仕方なく読み進めるうちに、面白くて仕方なくなってしまう。時間も忘れ、吸い込まれるように1週間で読了。続けてもう1回、さらにもう1回と一気に3回通読して得た結論。これは紛れもない名著であり本物の哲学書。これで最低10年は「遊べる」。既成のジャンルやディシプリンにすんなり収まるような行儀の良い（スケールの小さな）本からは決して感取しえない、過剰で邪悪で暴力的なアウラに充ち満ちている。こんな怪物的に面白いモノがなぜ翻訳されていないのか。日本では誰も読んでいないにちがいない。何ともうったいない！

私は「かくなるうへは絶対に自分の手で翻訳したい、いやしなれば」と決心した。他人に絶対に先を越されたくなかったし、他人に訳されたこの本など絶対に読みたくなかった。だから、原著が公刊されてすでに30年以上が経過していたにもかかわらず、翻訳されずに放置されていたこと自体、僥倖としか思えなかった。外国語文献を自ら翻訳したいなどという奇妙な思いはそれまでつゆほども抱いたことがない私にとって、これは異常としか言いようのない出来事だった。すべては原著の底知れない〈力〉のなせる業である。私はそれに、いわば首根っこを掴まれてしまったのだ。

それから3年半後に本書公刊の運びとなったが、書物とのこんな不思議な出遭いはおそらく最初で最後だと思う。とはいえ、私はまだ本書を「遊び」尽くしていない。とりあえずの翻訳が終わっただけで、本格的な取り組み（研究）はこれからである。たとえば、上の造語は最終的に「前提的／内部的」と訳したがこれははたして適切なのか、等々。しかし、本書の読者にまずはぜひとも共有していただきたいのは、私が原著の読書体験で得た、めくるめく知的快楽である。Let us play together!

川谷茂樹 (kawatani@wise.hokkai-s-u.ac.jp)

私の研究

ESDのパラダイムにおける生涯に渡る自分の身体イメージ

新保 淳（静岡大学）

まだ、多少ながら研究を継続しております。昨今、研究費の資金獲得が学部内でも義務づけられていることもあって、「科研」への応募もまた、どうせならば「採択」してもらえることを目標にした研究内容にしたいと思いつつ、無い知恵を絞っているのが現状です。

そんな中、昨年度「挑戦的萌芽研究」で採択されたのは、「ESDを視野に入れた学校体育におけるプログラム開発」というテーマでした。ESDについては、皆さんもご存知のこととは思いますが、“Education for Sustainable Development”の略称であり、ここでの学びはまた、昨今の21世紀に向けた学習方法等とも関連づけられるものです。研究内容としては、これまでを振り返りつつ、新たなパラダイムにおける学校体育とはどのようなものであり、それに向けた多少ながらも具体的なプログラム案について考えて見たい、というものです。

このテーマの出発点は、科研メンバーの大半が年老いて昔ほどの運動・スポーツができなくなる現状があったことです。すなわち、「右肩上がり」の身体的状況があることを前提とした「生涯スポーツ」ではなく、それぞれの年代（身体？）に応じて、それぞれのレベルとする運動・スポーツ、それを「持続的」に実践することこそが必要だという、まさに若者には無い発想（なんとなく寂しくなる発想かもしれませんが）です。具体例をあげるならば、毎朝のラジオ体操、少々遠くで下車してからの通勤、駅の構内をスラロームのご

とく人々をすり抜けるステップ・ワーク etc. ここまでで最も大事なことは、こうした（他人に見れば全く退屈きわまることのない）運動（・スポーツ）を継続していくために、その日の「自己反省（自己観察）」と次の日の動きの目標、すなわち「自己の身体イメージ」の創出、さらにはそのための計画&企画を練ったうえでの実践を、日々、持続的に行うことにあります。最後に、こうした「中高年」をより多く輩出するためには、小学校、中学校、高等学校の学校体育、中でも教科体育はどのようにあるべきかについて考える。ここでようやく、科研のテーマに辿り着きました。

「運動に親しむ」ためには、「できない→できる」にすることが必要条件とされる限り、「できない」ままの人は、「親しむ」ことがないままに人生を送る可能性が高くなります。付け加えるならば、誕生から死に至るまで、切り離すことのできない「自らの身体」そのものとの対話もなくなるというきっかけが、少なくとも学校体育であってはならないと考えます。

生涯にわたって持続的に自らの身体と対話を継続することは、スポーツ実施率の伸びとは異なった次元での話題であることを再確認しつつ、改めて学校体育に与えられた課題について、これからも考えていきたいと思っています。

新保 淳 (shimbo.atsushi@shizuoka.ac.jp)

浅田学術奨励賞・記念講演報告

荒牧亜衣（筑波大学）

大阪体育大学にて開催された日本体育学会第 67 回大会において、浅田学術奨励賞・記念講演の機会をいただきました。本講演では、体育学研究第 58 巻第 1 号に掲載されました「第 30 回オリンピック競技大会招致関連資料からみるオリンピック・レガシー」の内容について、あらためてご報告させていただくとともに、「オリンピック・レガシー」とは何かについて、近年の先行研究の成果も紹介しながら発表させていただきました。

レガシーという用語は、2003 年版のオリンピック憲章に追加された、オリンピック・ムーブメントの文脈においても比較的新しいことばです。最近では、2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会で使用される競技施設計画の是非をめぐって、日本国内でも盛んに用いられています。今日、レガシーということばはオリンピック競技大会だけでなく、国際的なスポーツ・イベントの招致、開催においても使用されるようになっており、ポジティブなものからネガティブなものに至るまで、その対象や範囲は拡大し続けています。

これまで、先行研究において議論されてきた通り、レガシーを国際オリンピック委員会（以下、IOC）が強調するようになった背景には、否定的あるいは予期しないようなマイナス効果を避けたいという IOC の意図があったと推察されます（舛本・本間，2014）。加えて、IOC が唱えるレガシーは肯定的評価に埋め尽くされた<レガシー>であるとの指摘もあり、オリンピック競技大会の候補都市が提出する開催概要計画書を筆頭に、レガシーということばに計画概念としての意味合いが、IOC によって戦略的に付与されたことが読み取れます。

さらに、表面的なロンドンオリンピックの成功のキーワードとして捉えられた「レガシー」、東京オリンピック・パラリンピック組織委員会や関連組織がレガシーという言葉をあたかも錦の旗印のごとく利用している現状など（海老島，2015）、様々な意味合いで使用されるようになっており、ますますレガシーということばが多義的に用いられ

るようになっていきます。私は、レガシーということばが多義的になればなるほどこの概念の本質が曖昧になると考えています。このことは、オリンピックのオリンピックたる所以である理念を置き去りにする事態を引き起こすと危惧しているからです。

そこで、本講演では、オリンピック・レガシーについて「計画すること」と「評価すること」の2つの枠組みに従い、再整理することを試みました。「計画すること」の視点からは、開催概要計画書を代表的なものとして、過去の大会をモデルとしたレガシー計画のコピー&ペーストの進行が懸念されることを指摘しました。観光客の増加やスポーツへの関心の高まり、都市開発の加速といった文言は、レガシーを計画する際に多用されますが、過去の大会のレガシーの模倣が目的になることはもちろん避けなければなりません。また、「評価すること」の視点からは、過去に開催されたオリンピック競技大会を評価する枠組みとしてレガシーを再配置することを提案しました。

オリンピック憲章において、オリンピック競技大会のレガシーを推進することはIOCの使命と役割の一つとして位置付けられています。一方で、このことばには、1970年代から1980年代にかけてIOCが抱えた多くの課題と1998年に発覚した大会招致をめぐるIOCスキャンダルに対する反省的意味合いが多く含まれていることも確かです。私は、「オリンピック・レガシー」を問うことを通して、今後もオリンピック・ムーブメントを対象に研究を続けていきたいと考えています。

荒牧亜衣 (aramaki@taiiku.tsukuba.ac.jp)

第 67 回日本体育 学会参加報告

学際的シンポジウムⅢ「スポーツを文化として根づかせるた めに—カール・ディームと大島鎌吉の意志を手掛かりに—」

釜崎 太 (明治大学)



今年8月に開催された第67回日本体育学会(大阪体育大学)において、本部企画シンポジウム「スポーツを文化として根づかせるために」が開かれた。このシンポジウムへの登壇依頼を頂いたときには、正直、大きな戸惑いがあった。私のテーマが「哲人カール・ディームについて」というものだったからである。ディームは、スポーツや五輪の繁栄の基礎を築いた人物として知られ、日本にも信奉者は多い。ところが、現在のドイツでは、ディームとナチのつながりが指摘され、ディームの教え子たちとの間で激しい論争が続いている。私はこうした論争は尊いものだと思う。日本のスポーツ言論界では、政治とスポーツの関係について問う試み自体が、「左」とか「体育解体論」といったレッテル貼りで排斥され、錯綜的な思想状況を見極めようとする姿勢が希薄であるように思うからである(ディームの戦争賛歌が、なぜ日本では見落とされてきたのか?)。こうした現状に一石を投じたいという密かな願いが、シンポジストを引き受けた動機であったようにも思う。

準備段階では、企画者の中房敏朗先生(大阪体育大学・スポーツ史)から、「日本のスポーツ文化に益するような報告を」、「複数者による知の創造へと結びつくような議論を」という要望があり、このふたつが各報告の基調となった。

シンポジウム当日、まずは私から、ドイツのスポーツフェラインに具体化されている文化性にディームが果たした役割を報告させてもらった(フェライン等の詳細は明治大学HPに

掲載. http://www.meiji.net/opinion/culture/vol112_futoshi-kamasaki). 滝口隆司さん(毎日新聞社)からは、ベルリン五輪の入場行進の際、孫基禎選手の後ろを嫌った日本人選手に、大島鎌吉が「五輪に日本人も朝鮮人もない！」と一喝したなどのエピソードを交えながら、大島の思想が紹介された。最後に石坂友司先生(奈良女子大学・スポーツ社会学)から、長野五輪の後、地元にはスポーツクラブを根づかせようと尽力しながらも挫折した「草の根の哲人」について報告があり、全体のまとめとして、①スポーツが生み出す利益やメダルが絶対的なものではない、②哲人の理念を無批判に受容するだけでは不十分、③五輪から得られるのは「文化としてのスポーツについて考えること」という結論が示された。この3点に、本シンポジウムの主張が凝縮されているように思う。

私の報告では、「文化としてのスポーツについて考えること」と関連して、アドルノとベンヤミンのメディア論を取り上げた。スポーツの産業化を文化の頹落として批判したアドルノ。文化のメディア化に大衆の自生的意味生成を見出したベンヤミン。この図式のもとに、スポーツや五輪のメディア報道にある種の肯定的な見方が付与されてきた。だが、ベンヤミンの著作を精読すればわかるように、「大衆のパニック的反応」や「ドイツの政治的挫折」を批判しているベンヤミンは、メディア社会を楽観していたわけではない。

ディスカッションでは、司会の岩瀬裕子さん(元アナウンサー、現首都大学東京大学院・文化人類学)から「文化として根づかせる」という発想自体に「エリート主義」が含まれているのではないかと、という疑問がぶつけられた。人類学的な視点からの興味深い指摘である。打ち合わせの段階では、科学化が困難なところに重要な問題が数多く潜んでいる、その具体的事例に言及する手順になっていたのだが、私はついアドルノ(エリート派)とベンヤミン(民衆派)の論争を口にしてしまった。その真意は、現実の問題をしっかりと私たち科学者が認識し、エリート主義を自壊したうえでなら、科学者が「文化として根づかせる」ことに果たすべき役割は必ずある、という主張にあったのだが…。

石坂先生が「草の根の哲人」の次のような言葉を紹介されていた。「メダル至上主義はそろそろ考える時期にきている…メダル以外に、人間にとって価値のあるものは、他にありそうだ」。私は、本シンポジウムでの他分野の先生方との議論を通して、スポーツの価値を称賛するだけの哲学は、そろそろ考える時期にきている、と実感した。スポーツ哲学にとって価値あるものが、他にありそうなのである。善悪の二分法では決して割り切れない、子どもたちの現実、スポーツや五輪の錯綜的な現実。ナチズムに直面して文化の現実を見つめ直さざるをえなかったベンヤミンなら、現代のスポーツをどのように語るのだろうか。

釜崎 太 (kamasaki@meiji.ac.jp)

**第 38 回 日本体育・スポーツ
哲学会 参加報告**

先駆者たちの語りを聴いて感じたこと

高橋 徹 (仙台大学)

今年の日本体育・スポーツ哲学会は、千葉大学にて9月10日、11日の2日間にわたって開催されました。私も例年通りに参加し、今大会では発表を行ったのですが、本稿では大会プログラムの中心的企画であったシンポジウムの内容について報告したいと思います。

今大会のシンポジウムのタイトルは『実践からの体育・スポーツ哲学』の再検討『身体が育つ』ための知の諸相—実践からの哲学が何を明らかにし得るか—であり、前年度からの2カ年継続の2年目に当たる企画でした。私個人としての思いを述べさせて頂くと、今回の

シンポジウム（昨年度も含む）は、大会開催前からそこでの議論を聞くことがとても待ち遠しい企画でした。なぜなら、体育・スポーツ哲学領域を牽引してこられた“先駆者”とでも言うべき先生方がシンポジストに名を連ねていたからです。通常、数カ年継続企画のシンポジウムにおいて、前年度以前のシンポジストの方が登壇するということは珍しいように感じましたが、今回は、今年度のシンポジストである遠藤卓郎先生（つくば気功研究所）、滝沢文雄先生（千葉大学）、石垣健二先生（新潟大学）がそれぞれの発表を終えた後に、昨年度のシンポジストである加藤泰樹先生（元上越教育大学）、原田憲一先生（岐阜大学）、森知高先生（福島大学）の3名を加えた形で議論が進められました。以下では、議論を聴いた私自身が感じ取った事柄を中心に筆を執っていききたいと思います。

シンポジウム提案者の意図であるのか偶然なのかは判断しかねますが、今回の議論は「体育では何を教えれば良いのか？」がシンポジストに通底する一つのテーマであったように感じました。もちろんそれは、学習指導要領等の制度的枠組みを超えた「体育」の可能性を追求するというテーマです。そしてそこを基盤としつつ、「身体はどのように育つのか?」、「身体の育ちに運動はどのように関わるのか?」、「身体を育てることが人間の教育とどのような関係にあるのか?」、「運動をすることで身体はどう変わるのか?」などの種々のテーマに議論が進んでいたように思われます。またそれに加え、今回のシンポジウムのもう一つの特徴として、議論の端々に「よく分からない…」や「はっきりしたことは言えない…」、「自信は無いのだけど…」などの表現がシンポジストの口からは漏れていたような印象を受けました。つまり、およそ学術論文の文面上では目にする事の無い、不明確で根拠に乏しい内容の議論がその場では展開されていたということです。しかし、それは否定的な様相を伴うものではなく、未だ究明できていない課題が体育・スポーツ哲学の領域には多様に存在するという意味合いを持ったものでした。「体育とは何か?」、「身体とは何か?」、「運動とは何か?」、このような最も素朴なテーマに対峙することが体育・スポーツ哲学領域にとっての課題の一つであると思いますが、そのような問いに長年わたり挑んできた先駆者であっても、そのテーマを語り尽くしきった訳ではないという状況がそこには見て取れました。

さて、今回のシンポジウムにおける先駆者の先生方の議論について、私を含めた若手研究者はその内容を十分に理解し、そして残された課題を受け継いでいくことも必要になるのだと思います。偶然にも、今大会での私の研究発表のタイトルは「身体運動の教育的意義の再検討」というものでした。発表の内容がシンポジウムの内容と重なるものとなってしまいました。学会も終わりひと月ほどが経つにつれ、先駆者たちの残した課題を少しでも引き継げたのだろうか、ふと考えることがあります。明らかにしなければならぬ面白いテーマがまだ沢山残っているのだということに気付かせてくれた今回のシンポジウムでした。

高橋 徹 (tr-takahashi@sendai-u.ac.jp)

IAPS2016

参加報告

遥か彼方、古代ギリシャのアウラを感じながら(?)

松田太希(広島大学大学院)

長い行程を耐え抜き、アテネの地に降り立った。どんな場所なのだろう。わくわくしながら、空港のドアを飛び出した。その瞬間、僕の鼻に飛び込んできたのは、決して快適とは言えない生暖かい風と、タバコの煙だった。ギリシャの人たちは、本当によくタバコを吸うようだ。今回の旅で、タバコを見ない日はなかった。別にタバコを毛嫌いしているわけでもないし、ギリシャでも、生暖かい風くらい吹くだろう。ただ、とにかく、僕のギリシャへのフ

アースト・インプレッションは、タバコの匂いと生暖かい風だった。

学会は、初日から盛りだくさんの内容だった。初日は、アテネからオリンピアへの移動を兼ねたバスツアー。パナシナイコやネメアを観光しながら、1日かけて、オリンピアまで移動した。

2日目からは、本格的に学会が開始された。この日は、ジム・パリー（元リーズ大学）のオリンピック研究の功績を称えるシンポジウムが行われた。オリンピアでの開催ということで、テーマがそういうことになるのは当然の成り行きだったのだろうが、正直なところ、「国際オリンピック推進会議」とでも言ってしまえそうな場となっていた。もっとも、フロアからは、「オリンピズムばかり叫んでいてはだめなのではないか」という趣旨の発言が出ていたので、いくらかでも、IAPSの健全性を感じることはできた。

3日目には、自分の発表があった。演題は、”The Nature of Sports Groups in Japan: Or Its Relation to Violent Phenomena”。1日目の遺跡ツアー中、何人かと日本の暴力問題について話をしたが、皆こぞって、「それは日本の文化から来ているのだろう」と言っていた。僕は、そういう説明に距離を置いてきているのだが、「体罰で高校生が死んだ」と聞いた瞬間の彼らの驚愕の表情を見ていると、日本の文化・風土と暴力の関係を真剣に考えなければならぬと考えざるを得なかった。発表の内容自体は、フロイト、ジラールとともに、スポーツ集団の人間関係の一般的な構造をまずは取り出し、そこに、『甘えの構造』の土居健朗の議論を接続し、「甘え」によって示される日本的な人間関係が暴力とどのように関係しているのかについて論じた。発表後、アンドリュー・エドガー（カーディフ大学）が、「フロイトとジラールの接続が面白かったし、何よりも、問題意識が現実に根を下ろしていてよかった。昨日のオリンピックシンポジウムは浮ついていて」と声をかけてくれた。いろいろな意味で、とてもうれしいひとことだった。

4日目は、口頭発表が夕方まで行われ、夜は、ホテルのレストランでバンケットがあった。欧米系の参加者たちはギターを片手に歌を歌い、アジア系の参加者たちはその横でひっそりと談話をしていた。この分離は、印象的だった。欧米系とアジア系の分離はこの時だけでなく、学会の至る所で散見された。おそらくは、言葉の問題が大きい。それがどうしようもないことなのか、善いのか悪いのか、よく分からないが、どことなくさみしい気持ちにとりつかれていたのは確かだった。

最終日は、オリンピアの美しい朝日の下、初日と同様にバスで出発し、ランチと遺跡ツアーのためにデルフィを經由。19時頃に、再びアテネのアクロポリス美術館前に帰ってきた。バスを降りた後は、ほとんどのメンバーが一目散に帰路についていた。僕だけでなく、ほとんどの人にとって、長い旅だったのだろうなと感じた。

今回、日本からは、僕他に、山口順子先生、舛本直文先生、畑孝幸先生、松山直輝先生が参加されていた。特に、山口先生、舛本先生、畑先生からは、格別なご配慮とサポートをいただいた。先生方に助けて頂くことがなければ、今回の学会を乗り切ることはできなかった。この参加報告の場を借りて、御礼申し上げます。

松田太希(広島大学大学院) (taiki-matsuda@hiroshima-u.ac.jp)

運営委員会より

釜崎 太 (明治大学)

○体育哲学専門領域の HP について

HP についてお知らせいたします。現在、下記の URL にて HP を公開しております。これに関するご意見もお寄せ下さい。

<http://163.43.177.95/genri/framepage5.html>

○専門領域メーリングリストへのご登録のお願い

新しいメーリングリスト「Freeml」(<http://www.freeml.com/>) の運用を開始しております。メーリングリストへ登録済みの方へはメーリングリストによって会報が配信されております。速報性、経済性、専門領域活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げる次第です。グループへ参加するには、総務担当：高橋浩二 (takahashi@nagasaki-u.ac.jp) までご一報ください。事務局にて登録の手続きをさせていただきます。

○体育・スポーツ科学情報コラムの発行について

日本体育学会企画による『体育・スポーツ科学情報コラム』が発行され、全ての専門領域から情報コラムが寄せられています。下記の URL にてコラムが公開されておりますのでご覧下さい。

<http://taiiku-gakkai.or.jp/column>

釜崎 太 (kamasaki@meiji.ac.jp)

「体育哲学研究」編集事務局より

森田 啓 (千葉工業大学)

○学会・定例研究会発表者への投稿のご案内

『体育哲学研究』47号(2017年3月発行予定)の原稿を募集しております。学会大会や定例研究会で発表なさった方は、下記の森田のアドレスに是非ご投稿ください。研究報告ですと4ページまでは無料です(別刷は有料です)。締め切りは2017年1月末日です。

森田 啓 (hirakumorita@p.chibakoudai.jp)

定例研究会のお知らせ

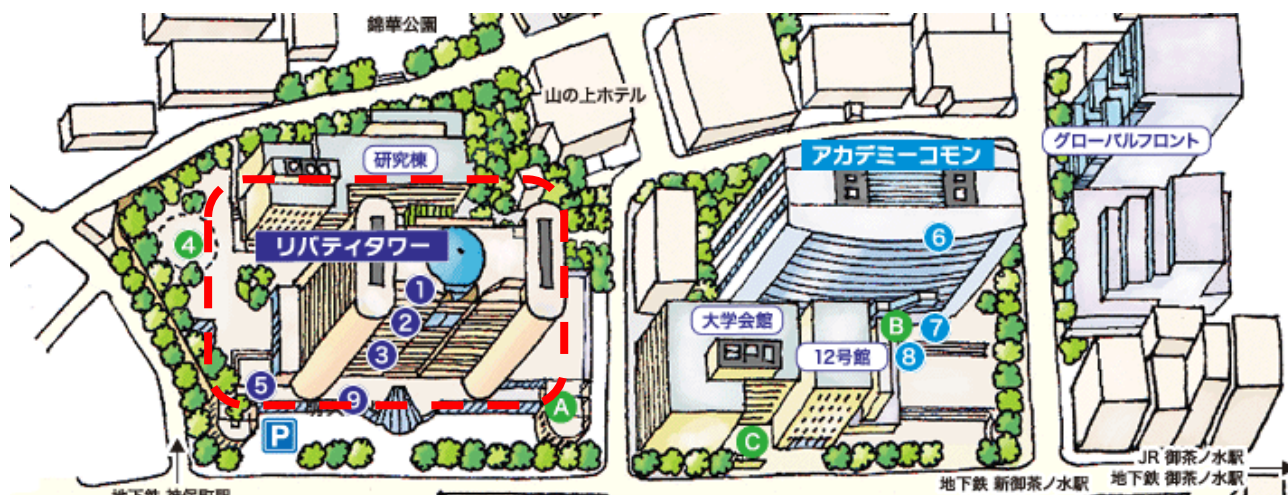
阿部 悟郎(東海大学)

平成28年度第2回定例研究会を2016年12月10日(土)に下記の要領で開催いたします。なお、研究会終了後18時より懇親会を予定しております。会員の皆さま、ぜひともご参集ください。

- ・日 時：2016年12月10日(土) 15:10(15時より開場)～17:30.
 - ・会 場：明治大学駿河台キャンパス リパティタワー・8階1084教室
- 詳細は下記 URL をご参照下さい。

http://www.meiji.ac.jp/koho/campus_guide/suruga/6t5h7p000001h0z0-img/720_campus_suruga.gif

JR 中央線・総武線，東京メトロ丸ノ内線／御茶ノ水駅 下車徒歩 3 分
 東京メトロ千代田線／新御茶ノ水駅 下車徒歩 5 分
 都営地下鉄三田線・新宿線，東京メトロ半蔵門線／神保町駅 下車徒歩 5 分



発表内容（予定）

【発表①】 裴芝允（広島大学大学院）プラグマティズムとしての身体感性論—身体感性論におけるジョン・デューイと体育哲学への示唆—

プラグマティズムは、本質主義に異を唱える思想的転換であり、人間の生き方そのものに思想の基盤を引き下ろしている。また、リチャード・シュスターマンの身体感性論は身体とその経験、改良に関する学問である。身体感性論はプラグマティズムの流れの中で把握する必要があり、そうすることで教育論へ広げることができる。本研究では、ジョン・デューイを手がかりにプラグマティズムとして身体感性論の再検討を行う。プラグマティズムとしての身体感性論は、今日の「体育とは何か」という体育哲学の問いに対して、われわれを身体という生の原点に立ち帰らせる。

【発表②】 高橋浩二（長崎大学）「2016 国際運動哲学学術研討會」参加報告

日本体育・スポーツ哲学会では 2012 年から台湾身体文化学会及び台湾運動哲学会と国際学術交流協定を結び、学会大会時に招聘者から講演等を依頼している。今年度の日本体育・スポーツ哲学会第 38 回大会では、国立台湾体育運動大学の許立宏教授から特別講演をして頂いた。発表者はキーノートスピーチにおいて「The “knowing in practice” and human body in movement practice」の演題で発表した。本研究では、その発表についての概略や学会大会の様子を紹介したい。

【発表③】山口順子（早稲田大学非常勤講師）近現代日本の女性リーダー育成にみる

欧米型身体教育の3つの条件

近現代日本における女性リーダーの全人育成は、そのモデルを欧米に求めたため、身体運動という文化現象の学問的アイデンティティ構築の歩みと軌を一にしていた。そのユニバーサルでローカルなアプローチは、近代西洋がもつ心身を一体化できない身体観の悩みとも重なる。しかし、その限界を克服する試みもまた西洋から始まるように、欧米の心身科学の成果を取り入れた、知覚・認識の源泉として身体を理解する現代に通じる斬新さに溢れている。そうした身体教育の「知」の条件を欧米の3人の女性パイオニアのレガシー（偉業）から考察する。

【発表④】釜崎 太（明治大学）ビジネス時代のスポーツ哲学—消費社会のなかのス

ポーツと公共性—

ここ数年の日本プロ野球の市場拡大には目を見張るものがある。さらにはスポーツ庁や内閣府までもが各スポーツ団体に増収を求めるなど、スポーツとビジネスは不可分な関係にある。だが、「ビジネスの成功」が「スポーツの発展」に直結しないことも事実だろう。このビジネス化の時代に、スポーツにはいかなる思想が求められているのか。本報告では、明治大学大学院の西洋思想特講（<http://www.meiji.ac.jp/humanity/pickup/file1.html>）の授業内容から、プロ野球をボードリヤールの視点から分析した「消費社会論」と、ブンデスリーガをアーレントの視点から分析した「公共論」を取り上げる。

阿部 悟郎 (gr-abe@tsc.u-tokai.ac.jp)

次号予告！

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は河野清司 (konok@sgk.ac.jp) までお問い合わせ下さい。

体育哲学専門領域会報第20巻第3号

発行者 日本体育学会体育哲学専門領域
舛本 直文（会長）
編集者 杉山 英人（広報委員長）
発行日 平成28年11月11日
連絡先 〒263-8522 千葉県稲毛区弥生町1-33
千葉大学教育学部043-290-2616（直通）
アドレス：hidetohsk@faculty.chiba-u.jp

【編集後記】

4年後の東京オリンピック会場の選定をめぐって関係者と関係団体がゆれています。

文脈は異なりますが、体育・スポーツにも大きなゆらぎが生じています。体育においては、民間スポーツクラブで練習する青少年の増大と競技力の向上により、学校運動部のあり方にゆらぎが生じています。スポーツにおいては、障害者が健常者の試合に出場することにより、これまでのスポーツ的身体観にゆらぎが生じています。このようなゆらぎの背景にも着目しつつ、「体育とは何か」「スポーツとは何か」を原理論的に再考することが求められています。（K）